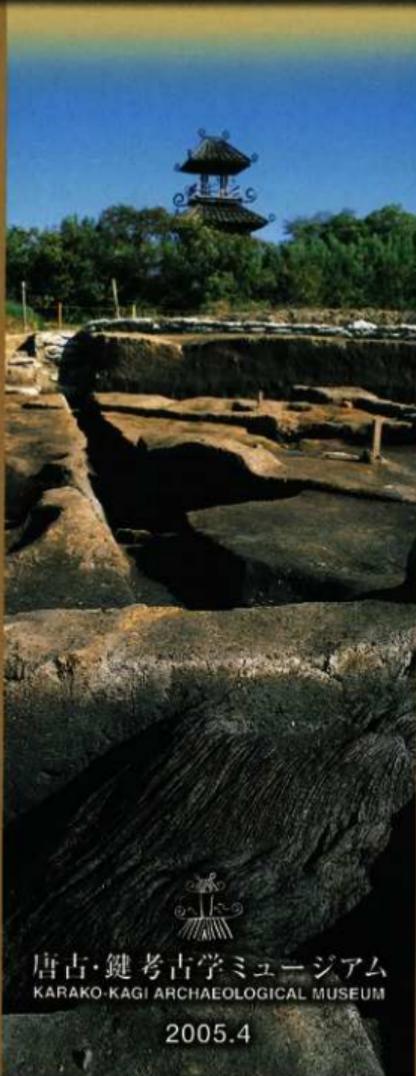


# たわらもと 2005 発掘速報展

Excavation of Site in Tawaramoto Town 2005



唐古・鍵遺跡  
Karako-Kagi

保津・宮古遺跡  
Hotsu-Miyako

黒田遺跡  
Kuroda

笹鉾山1号墳  
Sasahokoyama tomb No.1

日光寺推定地  
Nikkouji

阪手仁王前遺跡  
Sakate nioumae

十六面・薬王寺遺跡  
Jurokusen-Yakuouji

寺内町遺跡  
Jinaichou



唐古・鍵 考古学ミュージアム  
KARAKO-KAGI ARCHAEOLOGICAL MUSEUM

2005.4



**保津・宮古遺跡 第31次調査**  
遺跡中央部の調査。弥生時代の穴や古代・中世の井戸などが検出された。弥生時代の穴は、目前期前半のもので築基の成立も推定する上で重要である。また、古代・中世の遺構が顕著な保津環濠遺跡の東側に展開していることが判明した。

**笹野山1号墳 第4・5次調査**  
前方後円墳の遺跡。前周を確認する調査。後円部南側に土倉、前方部南側に、二層瓦葺土蔵が検出された。調査は、古代に建設されたが、この時期の土倉や土庫、馬廄などが出土しており、この時期の祭祀が繰り返られていたとされている。

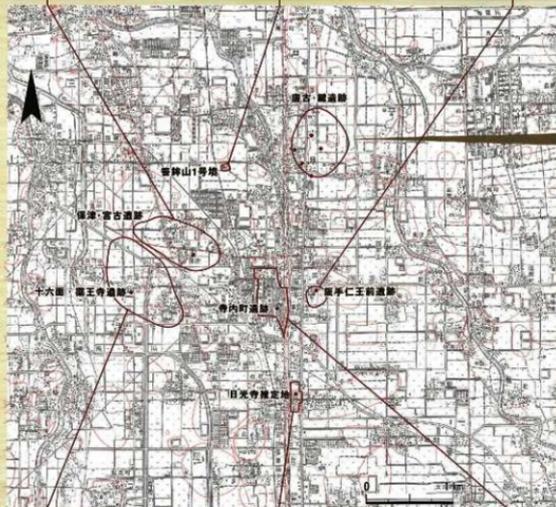
**阪手仁王前遺跡 第1次調査**  
遺跡北側の調査。小字名から中世寺院の存在が推定される遺跡である。調査では、多数の瓦が出土し、寺院境内あるいは経路であったことが判明した。調査区南端には12世紀後半の土状遺構があり、その北側には井戸も検出している。



**唐古・鏡遺跡 第94次調査**  
遺跡南側の調査。調査では、ムナを囲む角生埴土の層から古墳時代前期まで継続された環濠を推定した。調査からは、古墳時代の土倉とともに入土層が出土した。このほか中・近世の土蔵跡や井戸も見つかった。唐古氏祖伝環濠の遺構と考えられる。

**唐古・鏡遺跡 第93次調査**  
遺跡北西部の調査。3年間に及び調査で、大型建物跡の全容が判明。このほか、弥生時代前期から古墳時代前期にかけての土生土遺構も検出された。遺構では、打製石片が顕著な本製の鴨や白鷺形土製品、銅製など重要遺物も出土している。

**唐古・鏡遺跡 第98次調査**  
遺跡中央部の調査。唐古池の南側にあり、機軸土に構築されていたところもある。調査では、弥生時代前期の半環状物穴、中世の瓦葺土蔵や穴を推定した。これらと関係があるように弥生時代前期・中世の環濠や穴も見つかった。



**十六面・薬王寺遺跡 第21次調査**  
遺跡南西部の調査。古墳時代の後円部や古代の本田跡、中世の建物跡・井戸基などを検出した。特に中世の井戸では、遺物貯蔵跡を用いた井戸基もつづらがある。これらの井戸が互換性のある土器の存在などが多量に出土した。また、農具などの土器も推定される。

**日光寺推定地 第4・5次調査**  
遺跡中央部の調査。小字名から中世寺院の存在が推定される遺跡である。12世紀後半の穴や溝、柱穴も出土した。穴からは、瓦葺土蔵跡・小室などが出土した。2つの調査区間で出土した瓦は、調査区南西部に環濠と関係がある。

**寺内町遺跡 第8次調査**  
遺跡南東部の調査。調査地は北側には奥田寺が存在しており、今回の調査では、中世の奥田寺南側と近世の町屋跡の遺構も検出した。特に、近世末の穴から出土した柱礎や土倉の基、瓦が出土した土蔵跡子などは多量にあり、それらの関係が推定される。



**唐古・鏡遺跡 第99次調査**  
遺跡南西部の調査。調査区南側の下水道立込位置に伴う小規模な調査である。14号の調査区では、弥生時代の中世の遺構も検出し、不明であった調査区南側の遺構の存在が判明した。特に、環濠と関係する土倉や土蔵跡も推定された。調査区南側には、弥生時代の遺構も推定される。

**唐古・鏡遺跡 第100次調査**  
遺跡南側の調査。遺跡の範囲外を含む土の調査で、弥生時代の河跡や古墳時代前期・後期の溝や穴も検出した。調査・掘削結果の範囲には、幅30m以上の溝が存在することが明らかになった。古墳時代の遺構との関係は、今後の調査である。

**唐古・鏡遺跡 第96次調査**  
遺跡南西部の調査。調査では、唐古氏祖伝環濠定地あるいは南側に隣接する八咫神社に関係すると考えられる中世の瓦葺土蔵や穴を推定した。これらの遺構と関係があるように弥生時代前期・中世の環濠や穴も見つかった。



# 唐古・鍵遺跡2例目の大型建物跡

～弥生時代最大級の柱～ 唐古・鍵遺跡 第93次調査



大型建物跡の遺構平面図

## 第74次調査の大型建物跡

1995年の第74次調査で検出した大型建物跡は、唐古・鍵遺跡で初めて見つかったものである。調査地で周囲2間（7m）、桁行5間以上（11.4m以上）の規模である。この建物跡は、弥生時代中期前半に属するもので、独立棟持柱を有する総柱形式という特徴を有していた。特にケヤキの棟柱3本とヤマグワの棟持柱1本が残っていたが、他の柱は抜き取られていた。ケヤキの柱は、直径60cmもある巨大なものである。この建物跡は、唐古・鍵みうろを大きく囲む大土塁が築かれる以前のものです。高地部の中核的な施設と推定されている。



## 2例目の大型建物跡は、3年に及ぶ調査で完全解明

2001年の第84次調査、2002年の第89次調査、2003年の第93次調査の3年にわたる調査で2例目の大型建物跡の全容が明らかになった。建物跡が立地する調査地は、遺跡北西部の微高地にあたる。本地の南東側には区画溝があって低くなっている。この区画溝の延長の第80次調査では、ヒスイ勾玉2点を納めた薄鉄箆容器が出土している。また、微高地の北西部では壁柱住居群と環溝が走る。



薄鉄箆容器とヒスイ勾玉

## 特殊な柱構造をもつ大型建物跡

この建物跡は、北東-南西方向に軸をもつ平面長方形で、梁間2間（6m）、桁行6間（13.2m）の規模である。独立棟持柱を持たないが、第74次調査例と同様に総柱形式という特徴を有している。この建物跡では、東面柱列の基本となる柱7本以外に3本の間柱が存在している。この間柱は、後から据えられていることから、建物が傷んだためにこのような構造になったと推定される。

この建物跡は、弥生時代中期後半に属するもので、柱は、直径45～83cmのケヤキが使われていた。



基本柱(右)と間柱

## 弥生時代最大級のケヤキ柱

この大型建物跡には、18本のケヤキ柱が残存していた。これらの柱のうち、最も太いのが北西隅のケヤキ柱である。残存長250cm、直径83.2cmを測り、年輪は110年分あった。

この柱の下部には、長辺25～40cm、短辺18～25cmの長方形の目渡穴が、二孔一対で2ヶ所に分けられていた。この目渡穴には、柱置換時に使用したと考えられる10本前後の臺が残存していた。



大型建物跡の柱穴から出土した土器(第93次調査)



目渡穴1の臺



目渡穴2の臺



北西隅柱とその底面

## 大型建物跡の年代

一般的に遺構の年代決定は、その遺構から出土した土器や検出遺構、銅銭あるいは黒土（切り金印）する遺構で判断される。今回の第93次調査で検出した大型建物跡の時期は、柱穴から出土した土器で決定した。柱穴から出土した土器は、弥生時代中期中層、土器編年の型式としては、大和群1-1形式である。また、建物が発見される時期が大和群1-2形式になる可能性がある。このことから大型建物跡は、数十年前使用されていたであろう。

## 唐古・鍵遺跡の出土遺物(1)

～銅鐸鋳型と銅鐸形土製品～ 唐古・鍵遺跡 第93次調査

### 唐古・鍵遺跡の 青銅器工房跡

唐古・鍵遺跡では、これまで連続発掘にあたる第2次・61次・65次調査地で、青銅器鋳造関係遺物が出土した。また、第65次調査地では銅鐸鋳造関係の発掘から本地付近が青銅器の工場跡と推定してきた。この地区では、銅鐸の石製鋳型(同一個体)、土製鋳型片、風車等、高塚塚土製品(取皿)、鉛筆、鏡片など各種銅器関係の遺物が集っており、この地区での中間土から連続発掘の青銅器生産は確実であった。

### 唐古・鍵遺跡3例目の 銅鐸の石製鋳型

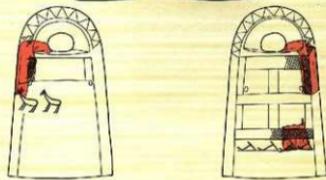
第93次調査において、銅鐸の石製鋳型が中世の農耕用の素掘り小溝から出土した。後世の遺物と混在する状況で出土したことから、本案の時期・出土地点は不明である。破片となった鋳型は、既に砥石に転用されており、わずかに鋳型面を残す程度である。鋳造された銅鐸は限定できないが、およそ40cm台の4区装裱文銅鐸と推定される。この調査区では、これ以外の青銅器鋳造関連遺物は出土しておらず、青銅器の工房跡が本地にもあったかは疑わしい。



銅鐸の石製鋳型とその復元図(第93次調査)

### 鹿と魚の線刻をもつ銅鐸形土製品

銅鐸形土製品は、唐古・鍵遺跡からこれまで16例出土しているが、絵面を有するものは少ない。今回の銅鐸形土製品は、復元すれば約14cmの高さになるもので、銅鐸形土製品として大きい部類に入る。A面には横帯文の下に鹿が、B面には4区装裱文の下に魚を線刻する。唐古・鍵ムラの工人が鋳造、あるいは保有していた銅鐸を模したのであろうか。



銅鐸形土製品とその復元図(第93次調査)

## 唐古・鍵遺跡の出土遺物(2)

～石器生産と各種石製品～ 唐古・鍵遺跡 第93・97・98次調査

### 一括廃棄されたサヌカイトの屑

唐古・鍵遺跡では、これまでにサヌカイトの原石や石器製作でた屑がまとまって出土している。

第93次調査においても、3～30mmのサヌカイト屑約10.7kgが穴に一括廃棄された例はない。サヌカイト屑の一括廃棄は、集落の北地区に多くみられ、この地区で石器製作をおこなっていたことを示す資料である。



微細なサヌカイトの屑(第93次調査)

### まとまって出土した玉造りの道具

唐古・鍵遺跡における玉造りの実態はよく判っていない。これまでの玉造り関係の遺物は少なく、点在していた。

今回の第98次調査では、玉素材にすりきり溝を入れ分割するための「石錐」や角柱の管玉を丸く管状に成形するための筋状の溝をもつ「玉砥石」がまとまって出土した。このことからこの周辺に玉造り集団の地区が想定される。



石錐とその素材の紅崖片石(上段)、玉砥石(第98次調査)

### 石庖丁が多く出土する

#### ムラの中央部

石庖丁は、唐古・鍵遺跡でも比較的多く出土する遺物である。第98次調査でも38点の石庖丁や大形石庖丁が出土した。本調査区の西20mでおこなった第53次調査においても98点の石庖丁が出土しており、集落全体の中でこの中央部の出土比率は高い。このような量の多さが何を表しているのかは不明である。



結晶片岩製の石庖丁や紡錘車など(第93-97-98次調査)

## 唐古・鍵遺跡の出土遺物(3)

～絵画上器と特殊な文様～ 唐古・鍵遺跡 第93・99次調査

### 鹿と戈をもつ人物

弥生時代の絵画土器のなかに、「鹿と戈をもつ人物」を描いたものがある。筑紫川(宇治川)流域の弥生前期土器に、大塚(平野遺跡)、南島(高倉・鍵遺跡(第13次調査))、清水(風連遺跡)の絵画土器や黒島(黒石上2号前期)などにみられる。

特に清水(風連遺跡)の絵画土器には、他に大型動物や鹿、矢筒の鹿などが描かれた絵画で覆われ、弥生時代のまつり(祭)を考案する上で重要な遺物になっている。このように神話や神話が異なりながらも共通する意匠を有している点は重要な点である。弥生時代のまつり(祭)には、鹿(二頭)と戈をもつ人物が祝祭を営むような行為があったのだろう。

### 鹿と鳥の線刻の下絵に盾をもつ人物

唐古・鍵遺跡では、絵画土器が多く出土する。第93次調査でも壺の胴部に線刻をもつ破片が出土した。線刻は、細描きと太描きの2種があり、細描き線はナデ消されているが、消しもれた部分には「盾をもつ人物」が観察できる。その後、この細描き線の上に太いヘラで鹿と鳥を描き直している。

「盾をもつ人物」の全体は不明であるが、本来はもう一方に「戈」をもっていたのであろう。下絵と違う絵を描いた理由は不明であるが、この人物は、清水(風連遺跡)の類例から祭祀を司る重要な人物であることは間違いない。

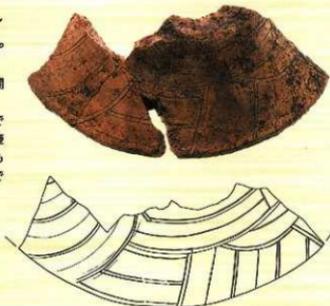


人・鹿・鳥が描かれた土器(第93次調査)

### 特殊な文様・弧帯文風のデザイン

弥生時代後期、吉備地域の器や石製品につけられた特殊な文様で、数条の弧線を組み合わせて帯状に展開している。

唐古・鍵遺跡では、第13次調査で出土した異形高坏や第14次調査の壺などにもみられる。今回出土したものは、高坏の胴部に描かれたものである。



弧帯文の描かれた高坏(第99次調査)

## 唐古・鍵遺跡の出土遺物(4)

～唐古・鍵に運ばれた土器～ 井戸に供献された土器～ 唐古・鍵遺跡 第93・98次調査

### 全容がわかる伊勢湾岸地域の壺

唐古・鍵遺跡では、各地から運ばれてきた土器が多い。弥生時代中期初頭には、伊勢湾岸地域の壺や内瀬口様土器が多く、壺は少ない。今回出土した壺は、全体の形がわかるものとして重要である。

壺の外表面は煤が付着して見にくい。未本科の植物茎を原料にした調整具で土器表面をナデしており、いわゆる「柔直(なで)壺」と呼ばれるものである。



伊勢湾岸地域の壺(第98次調査)



各地から運ばれてきた土器(左から瀬戸内、摂津、伊勢湾岸、河内、近江)(第98次調査)

### 清水確保のための折戸

井戸は、生活用水を確保するために欠かせない。唐古・鍵ムでも多くの井戸が掘削された。井戸の多くは素掘りの井戸で、数年経てば埋没してしまう。その埋没過程で、たぐさんの完全な形の土器を投棄している。これは、井戸の清水を使うことができたことの「水の神」への感謝のために供えられたのだろう。



井戸から出土した土器(第93次調査)

# 後円部の直径は32m

～盆地低地部に墳丘を残す前方後円墳～

笹鉢山1号墳 第4・5次調査

笹鉢山1号墳は、田原本町八尾に所在する、盆地低地部に墳丘が残る前方後円墳として貴重な存在である。これまでに5回の調査をおこない二重周濠を有する全長約97mの古墳であることが判明した。また、本墳の北西22mには馬と馬子の埴輪がセットで出土した円墳の2号墳が存在する。

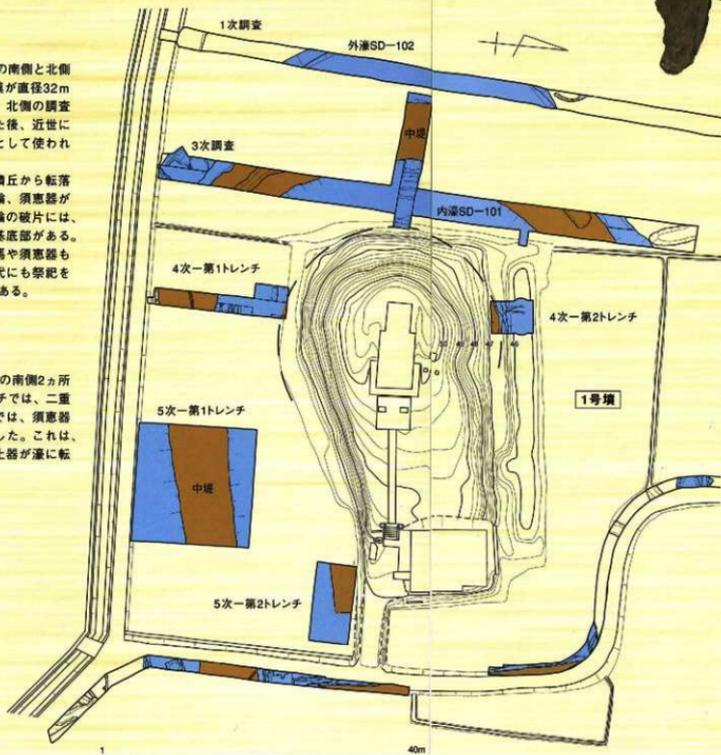
## 第4次調査

第4次調査は、後円部の南側と北側を調査し、後円部の規模が直径32mであることが判明した。北側の調査区では、内濠が埋没した後、近世に濠を掘りなおし、溜池として使われていたことが判明した。

南側の調査区では、墳丘から転落した家形埴輪や円筒埴輪、須臾器が出土している。家形埴輪の破片には、切妻造りの屋根部分や基底部分がある。また、奈良時代の土馬や須臾器も出土しており、この時代にも祭祀がおこなっていた可能性がある。

## 第5次調査

第5次調査は、前方部の南側2ヵ所を調査した。第1トレンチでは、二重周濠を確認した。外濠では、須臾器の大壺と短頸壺が出土した。これは、外濠で古墳祭祀をした土器が濠に転落したものであろう。



家形埴輪の屋根とその位置図

2号墳



家形埴輪の基底部分



土馬(奈良時代)

土甕



須臾器の小壺(奈良時代)

6世紀後半から10世紀初期まで製作された土製の馬型である。古墳時代の馬型は、腹や脚部を装飾した飾り馬が多かったが、奈良時代には省略された簡素になる。平城宮や馬頭宮など古代都城遺跡から多く出土している。

生きた馬の「彫代」として本時代に用いられるが、あるいは行状神を他界に送り出すために作られたものと考えられている。

## 笹鉢山2号墳

円墳跡部に伴う発掘調査で、初めて明らかになった直径約20mの円墳である。濠部分は、底に煎平を敷き、周濠部分のみが残存していた。南側の周濠からは、馬形埴輪や人物(馬子)埴輪のセット、円筒埴輪、家形埴輪、須臾器の破片が出土した。特に馬と馬子の埴輪は、セットとしてわかる良好な資料である。

## 中世の館

十六面・薬王寺遺跡 第21次調査

保津・宮古遺跡 第31次調査



黒書土器(十六面・薬王寺遺跡)



瓦器類・皿と土師器小皿(十六面・薬王寺遺跡)



紅が付着した白磁皿と瓦器鉢(保津・宮古遺跡)

田原本町には、平安時代から室町時代にかけての遺跡が多数存在している。これらの遺跡のなかには、小字名が「・・・垣内」や「・・・ヤシキ」など居館や集落があったことを推測させる地名を残すものや、条里制で整備された長方形の水田でなく矩形の畑地になっているところがある。中世文書から在地武士の存在が考えられ、これらの遺跡は、彼らの居館の可能性が高い。

### 十六面・薬王寺遺跡 第21次調査

十六面・薬王寺遺跡は、田原本町の西方、大字十六面と薬王寺にまたがる弥生時代から近世にかけての複合遺跡である。それぞれの地区で、中心となる時代と性格が異なる。

今回の調査地は、十六面集落の南側にあたる。この付近では、以前に第5次調査を実施し、古墳時代や鎌倉時代の井戸を検出している。今回の調査でも同時代の遺構を検出しており、この時代の集落が推定できる。鎌倉時代の井戸は、曲げ物容器の底を抜いた枠を井戸枠として利用したもので、7段積上げたりっばな井戸である。

### 保津・宮古遺跡 第31次調査

保津・宮古遺跡は、田原本町の西方、大字保津と宮古にまたがる縄文時代から近世までの複合遺跡である。

現在の保津集落は、「環濠集落」として有名であるが、この集落の形成がいつ頃から始まったのか、また、環濠がいつ掘削されたのかは、わかっていない。

第31次調査地は、保津環濠集落の外側にあたる東端で実施した。この調査では、平安時代から鎌倉時代以前の井戸が検出されており、環濠形成以前の集落が本地を含め、周辺に展開しているようである。

## 中世寺院

日光寺推定地 第4・5次調査

阪手仁王前遺跡 第1次調査

田原本町には、小字名から寺院が存在したことを推測できる遺跡が多数存在している。今回、調査した日光寺推定地と阪手仁王前遺跡もそのひとつである。

### 日光寺推定地 第4・5次調査

日光寺推定地は、田原本町の南方、大字千代に所在する遺跡である。小字名には「日光寺」や「中殿」、「今堂」などの地名が残っていることから、中世寺院の存在が推定されている。

これまでに3回の調査を実施し、鎌倉時代から室町時代の溝や柱穴を検出した。

第4・5次調査では、寺院に付設する屋敷を囲む溝と推定される溝構を検出している。



白磁類・皿と瓦器鉢・小皿、土師器小皿(日光寺推定地)

### 阪手仁王前遺跡 第1次調査

阪手仁王前遺跡は、阪手北集落と阪手南集落のほぼ中間に位置し、小字名には「仁王前」や「カワラド」の地名が残っており、これら地名から中世寺院の存在が推定されている。

本遺跡内には、阪手カハウト遺跡の墳墓地があり、発掘調査では中世の大溝や土墳墓、近世から近代にかけての民間信仰「クサミサン」の祭祀跡を検出している。

阪手仁王前遺跡の調査としては、今回初めて、柱穴や井戸、池状遺構を検出した。



瓦器鉢と土師器小皿の出土状況(阪手仁王前遺跡)



軒平瓦(阪手仁王前遺跡)

# 近世町屋の焙烙づくり

寺内町遺跡 第8次調査

田原本寺内町は、1600年平野氏初代の長春がこの田原本に教行寺を鎮致し、経営させたことに始まる。しかし、2代目長壽は、この教行寺を退去させるとともに、陣屋の造営と教行寺の跡地に浄照寺と本誓寺をいれ、陣屋可と定るとされる。

しかし、これまでの調査から、この寺内町遺跡では、鎌倉から室町時代の遺構を検出しており、当期の集落が存在していたことがわかっていく。また、遺跡の南側には、『大乗院寺社雜事記』に記載される薬田寺があり、勢力を誇っていた。

今回の調査地は、この薬田寺の南側に、平安時代から室町時代の遺構遺物が検出され、薬田寺関係のものと思われる。また、19世紀代の柱穴や穴が検出されているが、これは薬田寺の衰退とともに町屋へと変化した遺構と考えられる。

## 焙烙と型が多量出土

焙烙は、近世において土鍋から変化したものである。土師質で浅い鍋の形態を呈する。底部分は、厚さ2mm程度に薄く作られ、ゴマや豆・茶などの焙煎に使われた。

今回出土した焙烙は、煤の付着していない未使用のものが多数含まれており、製作後になんらかの原因で破損したものを一括廃棄したものであろう。

また、焙烙の型は、やや厚手の皿形を呈している。焙烙の底部分を型づくりするものである。内面には、製作時に付着した粘土が残ったままのものがある。



焙烙の型



焙烙

## 泥面子もまとまって出土

泥面子は、錢を投げて当てる「意錢」という平安時代の遊びに茶盞があるといわれているものである。江戸時代後期になると泥面子を用いた子供の遊びとして急速に発達した。

今回の第8次調査では、建物柱穴から泥面子190点が出土し、例のないものである。柱穴になぜ埋めたのかはわからない。

2cmまでの小さいもので、型に粘土を押し当てて抜いたもので、花・鶴・宝珠・小槍・軍配・箕盤・瓢箪・手桶などの意匠がある。梅花や菊花が多い。型で押し当てられた意匠の半対面は、平らで指の指紋が残っている。



泥面子の出土状況



さまざまな泥面子





保津・宮古遺跡

会期 2005年4月16日～5月22日

企画展「たわらもと2005発掘速報展」  
唐古・鍵考古学ミュージアム Vol.1

発行日 2005年4月16日／編集 唐古・鍵考古学ミュージアム／発行 田原本町教育委員会  
〒636-0315 奈良県磯城郡田原本町大字阪手233-1